

19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ 1851-1880 (3)

塩野和夫

第1章 アメリカンボードをめぐる状況

3 地域社会と人々の反応

アメリカンボードは19世紀中期においても、南北戦争という国内の混乱があったにもかかわらず、世界各地で意欲的な宣教活動を継続した。その結果、19世紀前期から活動を続けていた地域の中には、宣教活動に明らかな進展が認められる地域が現れた。また、この時期に日本・ミクロネシア・カトリック諸地域では、新たな宣教活動への取り組みが始められている。

これらの地域社会や住民は、ボードの宣教活動に対してどのように反応したのか。19世紀前期における地域社会の反応を分析するにあたり、4つのタイプを提示した¹⁾。これらの類型は19世紀中期においても、基本的には有効である。しかし、前期には想定されていなかった事態が中期には生じている。アメリカンボードの宣教活動に参加し、主体的にそれらを担った地域住民の出現である。逆に、宣教活動に協力する現地人に対する地域社会の反発も報告されている。

地域社会と住民の反応を分析するためには、地域社会の宗教的、文化的特色を踏まえることが必要である。そこで、「表2 類型化による19世紀中期アメリカンボードの宣教諸地域」における分類をここでも前提とする。その上で、宣教活動に参加した地域住民の存在を検討対象の中に加えたい。

なお、地域社会の分析を試みるためには、地域社会や地域住民から発信され

表2 類型化による19世紀中期アメリカンボードの宣教諸地域

	A 独立国の地域	B アメリカに併合された地域	C ヨーロッパ諸国の植民地
1 古代文明の地域	中国, 日本		インド・スリランカ
2 無文字社会の地域		アメリカ先住民	アフリカ(ズールー族), ミクロネシア
3 古代キリスト教の地域	中東		
4 イスラム教の地域	中東		
5 カトリックの地域	スペイン・オーストリア・メキシコ		

た史料が求められることはいうまでもない。しかし、それらを世界各地から収集し、分析することは筆者の能力を越えている。そこで、史料上の問題が残されていることを認めつつ、ミッションナリーヘラルドを初めとするアメリカンボード関連の史料を主に用いつつ、課題に取り組みたい。

古代文明の地域

「1 古代文明の地域」に分類されるのは、中国、日本とインド・スリランカである。これら3地域はアメリカンボードの宣教活動でそれぞれ特色を持っていた。インド・スリランカにおいては19世紀前期に宣教活動を開始し、中期に入るとボードの新しい方針であった「自治・自給・自ら宣教する教会」をかなり達成していた。中国では前期にすでに宣教活動が開始されていたが、中期に入ってもボードの新しい宣教方針に対応できていなかった。日本は、中期に入って新しく宣教活動が展開された地域である。

まず、インド・スリランカにおける地域社会と人々の反応を検討する。19世紀中期にインド・スリランカではマラーター ミッション (Maharatta Mission), マドゥラ ミッション (Madura Mission), セイロン ミッション (Ceylon Mis-

sion) に統廃合された。これら3ミッションの中期における経緯を見ると、いずれにも共通した顕著な特色が認められる。教会・教育などキリスト教活動の各分野で、それを主体的に担う現地人が次々と現れ、19世紀中期の間に少なくとも人数ではアメリカンボード宣教師の数を凌駕したことである。

1880年度のヘラルド誌に報告されているボード所属活動者と現地人活動者の人数は、次の通りである²⁾。

	ボード派遣宣教師	ボード派遣活動者総数	現地人牧師	現地人活動者総数
マラーター ミッション	10名	22名	23名	113名
マドゥラ ミッション	12名	28名	18名	304名
セイロン ミッション	5名	13名	7名	69名

1850年代初めは宣教師が活動の主体であり、それを支援し協力する現地人の存在が報告された。それとほぼ同時に、各ミッションで現地人説教者 (preacher) や牧師 (pastor) が出現した。さらに、彼らを中心にしたキリスト教による現地人共同体が成立する³⁾。もちろん彼らは地域社会では少数者であったが、キリスト教はもはや地域社会における個人的な存在ではなくなる。また、現地人によるキリスト教共同体の存在は、一面それ自身がキリスト教に対する地域社会の反応であると共に、それ以降、地域社会と人々のキリスト教に対する反応は外国人宣教師に対してだけでなく、現地人キリスト教共同体に対する反応ともなった。さらに、現地人によるキリスト教団体が成立し、伝道活動や教育活動などキリスト教の活動に協力した⁴⁾。

19世紀中期に地域社会と人々のキリスト教に対する反応は全般的に好転したと見られる。この時期にもヒンドゥー教やカースト制度によるキリスト教活動への反発やキリスト者に対する迫害が報告されている。しかし、ヒンドゥー教徒の中にはキリスト教活動に協力する者も現れた⁵⁾。セポイの反乱でキリスト教は被害を受けたが、致命的なものではなかったと見られる⁶⁾。現地のキリスト教団体は特に、高等教育機関の設立と維持に力を注いだ。教育活動には現地

社会や人々のさらに広範な協力があつたと思われる。

次いで、中国における宣教活動に対する地域社会と人々の反応を検討する。19世紀半ばで継続されたのは、福州ミッション (Fuh-Chau Mission) と北中国ミッション (North China Mission) である。広東ミッション (Canton Mission) と廈門ミッション (Amoi Mission) は、他の海外宣教団体に移管されている。これらのミッション報告で、現地人の助手 (Native helper) や現地人の働き手 (Native worker) あるいは現地人の学校教師 (Native teacher) に関する言及を見ることができる⁷⁾。あわせてアメリカンボードが現地人の協力者養成に努めたことを推測させる記事もある⁸⁾。

ヘラルド誌 (1880年1月号) によると、中国で働いていたボード所属活動者と現地人活動者の人数は次の通りである。

	ボード派遣 宣教師	ボード派遣 活動者総数	現地人牧師	現地人 活動者総数
福州ミッション	5名	16名	2名	41名
北中国ミッション	12名	31名	0名	10名

インドやスリランカでそうであったように、ボードは中国においても現地人キリスト者を宣教活動の担い手として育てようとした。それはある程度成功したが、教会の自治や自給を達成できるほどではなかった。また、地域社会にキリスト教による共同体が成立するほどでもなかった。

中国ではこの時期にも、キリスト教に反対する動きも多く見られる⁹⁾。それは地域の自治体や地域社会によるものであった。1860年代に事情は好転したという言及もある。しかし、それは19世紀前期に対して好転したのであって、地域社会の反発がなくなったわけではない¹⁰⁾。19世紀中期における地域社会の反発はどのように理解されるのだろうか。中期に清朝は太平天国の乱 (1851-1864) やアロー戦争 (1856-60) によって弱体化した。そのため、国家によるキリスト教禁教政策は名目化し、あるいは政策そのものが変更された。1860年

代のキリスト教に対する状況の好転は国家の政策変更と関係すると思われる。しかし、地方自治体や地域社会の反発は続いた。この事実は、民衆レベルでのキリスト教に対する反発が前期から変わることなく持続していたことを示している。地域社会の反発はまた、キリスト教の地域社会における共同体形成を疎外する大きな要因となったと考えられる。

19世紀中期に宣教活動を開始したのが日本である。日本における地域社会と人々の反応にはいくつかの顕著な特色を認めることができる。まず、根強い反キリスト教意識である。江戸幕府成立の早い時期から250年余り、日本では厳しくキリスト教が禁止されてきた。しかも、この政策には民衆も参加させられたので、民衆レベルにおいて反キリスト教意識が定着した。そのため、仏教徒などによる宣教活動への反対は地域社会の共感を得ていた¹¹⁾。ところが、1873年にキリスト教禁止を告げていた高札が撤去される。その頃から、欧米社会の文明全般に対する関心が日本社会で高揚し、欧米化に向けた社会変化が政府の指導もあって急速に進む。この変化を宣教師はキリスト教に対する状況の好転だと受けとめた。事実、教育活動、医療活動、伝道活動などは1870年代半ばから進展した。その中で、重要な役割りを担った人々がいる。アメリカで教育を受けた新島襄と澤山保羅、ジェーンズから薫陶を受けた熊本バンドと呼ばれた一群の人々である¹²⁾。彼らはキリスト教の伝道活動や教会の自治と自給、さらにキリスト教系学校の設立と運営に強い影響力を発揮した。

ヘラルド誌 (1880年1月号) によると、日本ミッション (Japan Mission) で働いていたボード所属活動者と現地人活動者の人数は次の通りである。

	ボード派遣 宣教師	ボード派遣 活動者総数	現地人牧師	現地人 活動者総数
日本ミッション	15名	46名	4名	31名

19世紀中期における日本の地域社会と人々の反応を、どのようにまとめることができるのか。日本においても、インド・スリランカ、中国に見られたのと

同様に民衆レベルでも反キリスト教意識は強いものがあり、それと仏教など既成宗教が結びついていた。そのような社会で自覚的にキリスト教の宣教活動に参加した現地人がいた。彼らは知識人であると共に、社会貢献への意欲を強く持つ人々であった。

無文字社会の地域

「2 無文字社会の地域」に分類されたのは、アメリカ先住民、アフリカのズールー族、そしてミクロネシアである。これら3地域にも「1 古代文明の地域」と類似した特色を見ることができる。すなわち、19世紀前期にはいくつもの困難に直面していたズールー族に対する宣教活動は、中期に入るとアメリカンボードの新しい宣教方針に対応して、部族主体のキリスト教組織と活動を強めていった。それに対して、ダコタ族においては、新しい方針への対応の萌芽は見られるが、十分なものではなかった。ミクロネシアは中期に宣教活動を開始した地域である。そこで、ズールー族における地域社会と人々の反応から検討する。

1850年にアフリカでアメリカンボードが宣教活動に取り組んでいたのは、ガボン ミッション (Gaboon Mission) とズールー ミッション (Zulu Mission) である。ところが、ガボン ミッションは1870年にアメリカンボードからアメリカ合衆国の長老派系海外宣教団体に移管された。19世紀中期を通じてボードが宣教活動を展開したのはズールー ミッションだけである。そこで、アフリカではズールー族の地域社会と人々の反応を検討対象とする。

1850年当初、宣教師は伝道、教育、印刷・出版などの宣教活動と並んで、ズールー族に対する倫理的批判や彼らのキリスト教への反発あるいは無関心を伝えている¹³⁾。その背後には、キリスト教とその文明に対するズールー族の反発と違和感があったと推測される。ズールー族の対応に変化が見られたのは、植民地政府が実施した保護地区 (Mission Reserve) 政策実施以降である¹⁴⁾。この時から、宣教師のいう文明化や倫理的改革が報告されるようになる。たとえば、

文明化を示す装いをした男女の出現が伝えられ、文明化が着実に進んでいると報じられる。あるいは、重婚に対する批判活動と共に、保護地区で生活する一夫一婦制を尊重する100組の家庭が、理想的な結婚生活として紹介されている¹⁵⁾。宣教活動に対する現地人の積極的な参加が伝えられるのもこの頃からである。まず、現地人協力者の存在が記事の中に記載される。1860年には現地人による「国内宣教協会 (The Native Missionary Society)」が設立され、この団体が集めた資金によって現地人の宣教師を雇用し、国内の宣教活動を支援している様子が伝えられている。さらに1860年代にはボードが宣教方針とした現地人による教会の指導、教会の自給と自治、そして現地人による宣教活動の展開が報告されている¹⁶⁾。その結果、ボード所属宣教師の主たる活動の場は高等教育の教授などに移行した。

ヘラルド誌 (1877年1月号) によると、ズールー ミッションで働いていたボード所属活動者と現地人活動者の人数は次の通りである。

	ボード派遣 宣教師	ボード派遣 活動者総数	現地人牧師	現地人 活動者総数
ズールー ミッション	10名	24名	4名	51名

19世紀中期に、ズールー族における宣教活動は順調に推移したかに思われた。ところが、1877-79年にイギリスとズールー族は戦争状態に入る。その時にキリスト教会の会員の中から危機的な状況が出現したという。すなわち、伝統的な重婚や“lobilisa”と呼ばれる娘の売買が、会員の中で問題になったのである¹⁷⁾。

19世紀前期にアメリカンボードが最も力を注いだのはアメリカ先住民に対してであった。ところが、1850年には7部族に対して取り組まれていた宣教活動が、1880年にはわずか1部族、ダコタ族だけになっている¹⁸⁾。そこで、アメリカ先住民についてはダコタ族に絞って、彼らの宣教活動に対する対応を検討する。なお、ダコタ族の場合、対象を「地域社会と人々」と呼ぶのは適切ではない。19世紀中期に何度となく強制移住させられているからである。そこで、「地

域社会と人々」ではなく「ダコタ族」とする。

当初、ダコタ族の間では伝道、教育、印刷・出版などの宣教活動が広範に取り組まれていた¹⁹⁾。しかし、ダコタ族の反応は限定されたものであり、たとえば、教会に加わる者も毎年数名を数える程度であった。その上、合衆国政府との緊張が高まると、キリスト教に対する反発も強まった²⁰⁾。そこには、欧米化への流れに適応しながらも、ダコタ族の伝統と誇りを重んじる人々の姿勢が推測される。合衆国政府との対立はついに1862年のスー戦争へと発展した。敗れたスー族の一支族であるダコタ族の人々は、刑務所やキャンプ地に収容され、将来への不安を抱える日々を過ごした。ところが、まさにこの時期にダコタ族のキリスト教宣教活動に対する対応に変化が現れる。一つにはこの時期から時には数百人に及ぶ多くの人々が教会に参加するようになったことである²¹⁾。宣教活動を支えるダコタ族の説教者や牧師、あるいは学校教師の存在が報告されるのも、この時期からである²²⁾。さらに1870年代に入ると、ダコタ族の牧師や説教者が教会活動で主要な役割りを担うようになる。また、ダコタ族の人々によるキリスト教団体が設立されている²³⁾。

ヘラルド誌(1880年1月号)によると、ダコタ ミッション(Dakotas Mission)で働いていたボード所属宣教師と現地人協力者の人数は次の通りである。

	ボード派遣 宣教師	ボード派遣 活動者総数	現地人牧師	現地人 活動者総数
ダコタ ミッション	4名	19名	7名	15名

ダコタ族の場合、彼らがキリスト教宣教活動への態度を変化させたのは、スー戦争の敗北である。合衆国の支配下に組み込まれたダコタ族にとって、新しい状況に対応することが部族存続の必要条件となった。したがって、ダコタ族がキリスト教への取り組みを変化させた底流には、新しい状況に懸命に対応していこうとする彼らの立場があった。

1852年にハワイ福音協会(Hawaiian Evangelical Society)に協力して、アメ

リカンボードはミクロネシアにおける宣教活動を開始した。ミクロネシアは広範な地域で、しかも宣教活動はギルバード諸島、マーシャル諸島、カロリン諸島の各地に及んだ。そこで、ミクロネシアにおける地域社会と人々の反応については、全般的な概説に留めることにする。

1850年代にミクロネシアの各地に宣教活動の拠点を設けたアメリカンボードの活動は、60年代に入ると伝道、教育、翻訳と印刷など、広く展開した²⁴⁾。これらの活動に反応を示す現地人がいた。なかでも教育活動には熱心な参加者があった。伝道活動にもわずかな参加者があり、この時期に少数の現地人も会員に加わった教会の設立が報告されている²⁵⁾。1960年代の後半に入ると、教会活動に進展が見られる。現地人協力者の存在が早くも記載される。教会に加わる人数も以前に比べて多くなっている。さらにキリスト教が地域の宗教や文化に影響を与えている様子も報告されている²⁶⁾。1870年代に入ると現地人による宣教活動が活性化した様子も報告から伺える。教会では現地人の説教者などが積極的に活動し、彼らの指導力が強まっていたからである。ある地域では、キリスト教の影響により、地域の偶像が放棄されるという事態も生じている²⁷⁾。

ヘラルド誌(1880年1月号)によると、ミクロネシア ミッション(Micronesia Mission)で働いていたボード所属活動者と現地人活動者の人数は次の通りである。

	ボード派遣 宣教師	ボード派遣 活動者総数	現地人牧師	現地人 活動者総数
ミクロネシア ミッション	6名	14名	22名	34名

他方、1879年には宗教的なあつれきから現地人キリスト者が首を切り落とされるという事件が起こった²⁸⁾。着実にキリスト教の影響が広がっていた半面、地域社会の反発は根強かったことが分かる。

古代キリスト教の地域、イスラム教の地域

アメリカンボードは1850年当時、中東及びその周辺地域でアルメニア人、ギ

リシャ人、ユダヤ教徒、イスラム教徒、ネストリウス派など、多様な宗教的文化的伝統を持つ人々を対象に宣教活動を継続していた。その後、他の海外宣教団体への移管やミッションの再編などを経て、1880年には4つのミッションに集約された。ヨーロッパ トルコミッション (European Turkey Mission)、西トルコ ミッション (Western Turkey Mission)、中央トルコ ミッション (Central Turkey Mission)、東トルコ ミッション (Eastern Turkey Mission) である。これらの中で、中東地域におけるアルメニア人の重要性を考慮して、西トルコ ミッションを中心に、地域住民と人々の対応を検討する。イスラム教の地域についても、ここに含まれる。

アルメニア人に対する宣教活動では、早い時期から現地人牧師の活躍が伝えられている²⁹⁾。それは彼らがもともとキリスト教徒であったことにもよるだろうが、彼らの存在は19世紀中期当初すでにボードの活動に積極的に関わるアルメニア人がいたことを示している。50年代に教会活動を支える現地人活動者は着実に増加した。1857年1月号のヘラルド誌は、現地人牧師、説教者、協力者を加えた現地人活動者が91名に達していることを伝えている³⁰⁾。60年代に入ると、ボードの宣教方針を尊重して現地人教会の設立とその自給、自治を目指すとともに、現地人活動者の経済的な負担を自覚的に担い始めている³¹⁾。なお、中東地域における4ミッションの1879年当時のボード所属活動者数と現地人活動者数は以下の通りである。

	ボード派遣 宣教師	ボード派遣 活動者総数	現地人牧師	現地人 活動者総数
ヨーロッパトルコミッション	10名	22名	3名	31名
西トルコ ミッション	24名	65名	17名	143名
中央トルコ ミッション	7名	20名	13名	92名
東トルコ ミッション	14名	37名	23名	199名

着実な宣教活動はまた、地域社会にプロテスタントの共同体 (Protestant Community) を形成した。共同体の実態や参加者の共同体に対する意識については

調査の必要がある。いずれにしても、中東はイスラム教徒の社会であった。19世紀半ばにはオスマン朝トルコが弱体化し、何度となくキリスト教徒に信教の自由が布告された。それでも、各地で宗教上の対立を背景にしたキリスト教徒への迫害が続いた。そのような中でプロテスタント共同体の出現は、地域社会に生きるアルメニア人を支援したであろう。イスラム教徒に対して、西トルコ ミッションは何度となく宣教活動を試みている³¹⁾。その底流にはグッデルに見られたイスラム教徒との共存関係を志向するキリスト教の姿勢があったのではないだろうか。

カトリックの地域

アメリカンボードは1870年代に入って、カトリックが支配的ないくつかの地域における宣教活動を開始した。いずれの地域においても、嫌がらせや迫害がおこり、ボードは慎重に活動を模索し、あるいは活動場所を変更した。それでも、地域住民の中からボードを歓迎し、あるいは活動に参加する者が現れた。彼らの協力を得て、ボードは礼拝を続け、教会を設立し、男女寄宿学校の経営などを行なった。ただし、一連の宣教活動における地域住民の協力内容についてはよく分からない。ヘラルド誌 (1880年1月号) は当時の現地人活動者数について、次のように伝えている。

	ボード派遣 宣教師	ボード派遣 活動者総数	現地人牧師	現地人 活動者総数
西メキシコ ミッション	3名	6名	0名	6名
スパイン ミッション	2名	4名	0名	10名
オーストリア ミッション	3名	6名	0名	8名

結 語

19世紀中期にアメリカンボードが宣教活動を展開した各地域社会と人々の反

応を、「表2 類型化による19世紀中期アメリカンボードの宣教諸地域」の分類に従って検討した。

「表2」が区分した5つの地域における反応にはどのような特色や他地域との違いが見られたのか。「1 古代文明の地域」では、19世紀前期にそうであったように、地域社会の持続的な反発と自覚的に活動に参加する個人がいた。これらはいずれも、「1」に類型化された地域がキリスト教に並ぶ文化圏を早くから形成していた歴史に関係するだろう。これと類似した事情が中東地域に認められる。「3 古代キリスト教の地域」と「4 イスラム教の地域」である。「4」は、「1」で反発を示した地域社会と重なる。イスラム教徒の中にはキリスト教の文化的教育的活動に関心を示す者がいた。しかし、宗教的にはほとんど関心を示さなかった。したがって、19世紀中期に「4」は類型としてほとんど意味を失っている。「3」で関心を示した人々は、「1」において自覚的に宣教活動に参加した個人と比較できる。「2 無文字社会の地域」では、しばしば集団の意思決定が個人よりも優先したと思われる。百人単位で改宗者が出た事例などはその事情を示していると思われる。ただし、時として状況が困難に陥る場合があった。そのような時に、自覚的に教会を支え続けた少数の現地人がいた。彼らは「1」における自覚的な個人に似ている。「5 カトリックの地域」の地域社会は「4」に似ている。確固とした一神教の文化圏ではプロテスタントの伝道活動は困難であった。

ところで、地域社会と人々はアメリカンボードの活動に影響を与えたのか。影響を与えた顕著な例として、高等教育機関の設立がある。高等教育機関の設立をめぐるのは、地域の期待とボードの方針が対立した。にもかかわらず、19世紀中期において各地では次々と高等教育機関がボードも協力して設立された。一連の経過は地域社会がボードの宣教活動にある程度の影響力を発揮したことを示している。

現地人活動者についても、今後の研究が待たれる。19世紀中期の特色は現地人活動者が地域の教会活動に大きな影響を与えたことである。それはボードの方針に基づくことであり、彼らはボードの指導を受けていた。しかしながら、

彼らはアメリカ人ではなく、現地人である。彼らはアメリカの宗教的伝統の下で育ったのではなく、地域社会の宗教的文化的影響の下で育った。そんな彼らはキリスト教と地域社会の関わりをどのように考えたのか。キリスト教の思想と文化を現地社会に紹介するにあたって、どのように調整したのか、しなかったのか。アメリカンボードの宣教思想研究において、19世紀中期以降は現地人活動者のキリスト教理解が重要性を持つ。

注

- 1) 地域社会と人々のキリスト教活動に対する反応の4タイプとして提示したのは、次の通りである。
 - 1 地域社会によるアメリカ文明とキリスト教の受容
 - 2 地域社会によるアメリカ文明の受容と住民個人によるキリスト教の受容
 - 3 批判的な地域社会における住民個人によるアメリカ文化とキリスト教の受容
 - 4 地域社会の反発による宣教師の撤退
塩野和夫『19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅰ』40頁
- 2) 'Statistics of the Missions of the A. B. C. F. M. for 1878-79,' *The Missionary Herald*, January 1980, p.4.
- 3) 現地人による宣教活動への支援や協力については、以下の記事などに記述がある。
'Annual Survey of the Missions of the Board,' *The Missionary Herald*, January 1855, p.7.
'Annual Survey of the Missions of the Board,' *The Missionary Herald*, January 1858, p.8.
各ミッションにおける現地人牧師の誕生や存在については、以下の記事などに記述がある。
'Annual Survey of the Missions of the Board,' *The Missionary Herald*, January 1856, p.8.
'Annual Survey of the Missions of the Board,' *The Missionary Herald*, January 1865, p.7.
キリスト教による現地人共同体の存在については、以下の記事などに記述がある。
'Annual Survey of the Missions of the Board,' *The Missionary Herald*, January 1857, p.6.
'Annual Survey of the Missions of the Board,' *The Missionary Herald*, January 1862, p.14.
- 4) 現地人によるキリスト教団体に、以下の組織があったと思われる。
Native Missionary Society (現地人宣教協会)
Native Evangelical Society (現地人福音協会)
Christian Vernacular Educational Society (現地人キリスト教教育協会)
Christian Alliance (キリスト教連盟)
- 5) キリスト教に対する反発や迫害が以下にある。

- Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.174
 ヒンドゥー教徒によるキリスト教活動への寄付が以下の記事に記されている。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1863, p.6
- 6) セポイの反乱によるアメリカンボードの宣教活動に対する被害について違った報告が以下にある。前者は被害がなかったとし、後者はステーションによっては被害があったとしている。
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.172
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1858, p.1
- 7) 現地人の助手や働き手、あるいは教師などの協力者に関する言及は以下などにある。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1852, p.9.
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1854, p.9.
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1867, p.8.
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1874, p.11.
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.257
- 8) アメリカンボードが現地人の協力者養成を努めたことを推測させるのは、たとえば以下の記事である。
 “to prepare native Christians, as rapidly as possible, to preach the gospel.”
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1857, p.10.
- 9) 地方自治体や地域社会の反発を記す記事として、たとえば、以下の報告がある。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1853, p.9.
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.250
- 10) 以前との比較において、キリスト教の宣教活動に対する反発が弱くなったとする表現に、たとえば、以下の記事がある。
 “opposition to missionary operations is not as strong as formerly.” ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1862, p.14.
- 11) 仏教徒などによる反キリスト教運動については、以下に言及がある。
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.265
- 12) 自覚的にキリスト教の宣教活動に参加した現地人指導者について、以下に言及がある。
 新島襄：‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1875, p.9.
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.271
 澤山保羅：Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.267
 熊本バンド：‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*,

- January 1878, p.6.
- 13) ズールー族に対する倫理的批判や彼らの宣教活動への反発あるいは無関心については以下に記載されている。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1851, p.3-4.
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1856, p.3.
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.281
- 14) 植民地政府による保護地区(Mission Reserve)政策については、以下に記載されている。
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.283
- 15) ズールー族における文明化の推進については、以下に記載がある。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1859, p.3.
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1861, p.3.
 一夫一婦制の推進については、以下に記載がある。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1858, p.3.
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.284
- 16) 現地人協力者の存在を早い時点で確認できるの、以下の記事である。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1859, p.3.
 1860年に国内宣教協会が設立されたこと及びその活動については、以下に記載がある。
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.285
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1863, p.2.
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1864, p.3.
 現地人による教会活動については、以下に記載がある。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1863, p.2.
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1867, p.3.
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1871, p.4.
- 17) 1880年頃、キリスト教会の会員の中にズールー族に伝統的な倫理的問題が生じたことについては、以下に記載がある。
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.289
- 18) 多くの部族に対する宣教活動を中止した理由として、ストロングは「文明化とキリスト教化を達成したこと」と「奴隷制をめぐる問題」を挙げている。
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.186
- 19) 印刷・出版活動では『「ダコタの友 (“The Dakota Friend”)』と呼ばれる英語とダコタ語の新聞』が発行されていた。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1852, p.13.

- 20) ダコタ族の反発について、たとえば、以下の記事に記載されている。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1857, p.12.
- 21) スー戦争の敗北後に活況を呈した状況については多くの報告がある。以下の記事は、不安な中で、1年間に400名以上の受洗者があったことを報告している。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1864, p.11.
 次の記事は当時のダコタ族は3万人を越えており、そのうちの5分の4はまだキリスト教の使信に触れていないと伝えている。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1870, p.17.
- 22) ダコタ族の説教者と牧師、教師について、以下の記事に記載されている。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1867, p.10.
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1871, p.11.
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1875, p.10.
- 23) ストロングは1873年に「ダコタ族キリスト教会衆連盟」(Congregational Association of Dakota) が設立され、1877年には「先住民の権利擁護連盟」(The Indian Right Association) が設立されたとしている。
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.193
 ヘラルド誌(1874年1月号)は、ダコタ族を主体とした「全体協議会」(A General Conference) の組織化を伝えているが、この組織は「ダコタ族キリスト教会衆連盟」のことだと思われる。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1874, p.13.
- 24) 1860年代に入った頃のアメリカンボードによるミクロネシアの各地における宣教活動については、以下に記載されている。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1862, p.15-16.
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1863, p.10.
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1864, p.11.
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.239
- 25) 1960年代前半における地域住民の反応については、以下に記載がある。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1862, p.15-16.
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.239
- 26) 1860年代にキリスト教が地域社会の宗教や文化に影響を与えたことについては、以下に記載がある。
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.235
- 27) キリスト教の影響により、地域の偶像が放棄された事態については、以下に記載がある。
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, pp.243-44
- 28) 1879年に現地人キリスト者が首を切り落とされた事件については、以下に記載がある。
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.246
- 29) 1851年一月号のヘラルド誌は、2つの福音教会とそこで働く現地人牧師を紹介している。
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1851, p.5.
- 30) ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1857, p.4.
- 31) ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1862, p.2.
 ‘Annual Survey of the Missions of the Board,’ *The Missionary Herald*, January 1868, p.4.
 Strong, W. E., *The Story of the American Board*, p.201